



# ピリピ人への手紙

私にとって生きることはキリスト

PART ONE

 **GraceCity**  
Church Nagoya

# 目次

- I. 使い方
- II. はじめに
- III. ピリピ人への手紙 1:1-11 → 恵みと感謝
- IV. ピリピ人への手紙 1:12-18 → 福音の前進
- V. ピリピ人への手紙 1:18-26 → 生きることはキリスト
- VI. ピリピ人への手紙 1:27-30 → 福音の市民権
- VII. ピリピ人への手紙 2:1-5 → 健全な共同体
- VIII. ピリピ人への手紙 2:5-11 → 健全な謙遜
- IX. ピリピ人への手紙 2:12-18 → 世の光

# 使い方

グレイスシティチャーチではC.O.M.A. (Context = 文脈、Observation = 観察、Meaning = 意味、Application = 適用) の方法を用いています。この方法を持って聖書箇所に取り組んでいきましょう。私たちは理論に焦点を当てた「議論のための質問」を「応答するための質問」（参加者が聖書箇所の中心テーマと個人的に対話することを求める質問）に置き換えることが適切だと考えています。

## 文脈 →

1. 周囲の節、段落、章、出来事などに注意を払い、読んでいる箇所が、聖書の中の特定の書物の文脈にどのように当てはまるかを確認してください。
2. この箇所が聖書全体の大きなストーリーにどのように当てはまるのか、つまり、神がイエス・キリストを通してどのように人々を救い、神の御国でご自身の支配のもとに生きていくようにしたか、に注目してください。

## 観察と意味 →

3. 聖書本文を注意深く観察しましょう。接続ワード（例: 「～なので」「もし」「ですから」など）、繰り返し、対話、物語、旧約聖書の引用などの詳細に目を留めましょう。

4. 聖書本文の意味を理解するためには、著者の目的や意図（聖書の著者はなぜこれを書いているのか？）を見極める必要があります。
5. 手助けとなる質問の例：
  - ▶ 誰が、誰に向けて書いていますか？
  - ▶ 著者と読者の状況はどうでしたか？
  - ▶ 取り組むべき問題があり、そちらへ目を向けるようにと促されていますか？
  - ▶ 繰り返されるテーマや、すべてをまとめている一つの主題はありますか？

## 適応 →

6. 神のことばを心に適用しましょう。「心」に関する良い質問をすることで、単に状況や行動に対処することの先へと進みましょう。例えば、「なぜ私たちはこうするのでしょうか？」「私たちは本当のところ何を望んでいるのでしょうか？」
7. 常に福音を適用に結びつけましょう。例えば、「キリストを知っていることは、私たちの神への従順にどのような違いをもたらすのでしょうか？」
8. 神、私たち自身、キリストにある救い、教会、世界などについて、その箇所が私たちに何を教えているのかを尋ねてみましょう。

はじめに



# はじめに

ピリピ人への手紙の主要なテーマは励ましです：パウロはピリピに住む信徒たちが、天国へ移住する市民として、この世での生活を送れるように、彼らを励ましたいのです。この生き方が出来ているかどうかは、神に仕え、またお互いに仕えることへの決意の深まりによって証明されるものです。パウロが勧める生き方とは、イエス・キリストの生き方にのみ現されているものではなく、パウロ、テモテ、そしてエパフロディトの生き方にも現れています。

## 大きな物語の中での位置付け

ピリピにあった教会は、パウロがヨーロッパで最初に開拓した教会であり、パウロにとって特別な意味を持ったところでした（使徒16:6-40参照）。最初の改宗者は紫色の品物を売っていたリディアであり、（4:2参照）。パウロとシラスは、占い師の奴隷の少女から悪霊を祓ったために投獄されたのですが、神が奇跡的に彼を救い出し、ピリピの看守に福音を宣べ伝えました。パウロは最初の出発の後、何度かピリピにいる人々を訪ねたようで、彼らは彼の宣教を積極的に支持し続けたのでした（4:15-16参照）。

パウロが獄中からピリピの信徒達へ手紙を書いたのは、エパフロディト（彼自身もピリピの信徒の一人）とともに送られたばかりの贈り物を受け取ったこともひとつの理由でした。しかし、この手紙はそのことに対する「感謝状」にはとどまらないのです。パウロは、エパフロディトが病気から回復した（2:25-30参照）という重要な知らせを伝えなかったのであり、エパフロディトを彼らに送り、やがてテモテ（2:19参照）も送れるかもしれないという希望を伝えなかったのです。テモテとエパフロディトが言及されている理由は、彼らがパウロがピリピの人々に望んでいたキリスト中心、そして福音中心の生き方の模範であったからです。

パウロはピリピの信徒たちの信仰を励ましたかったのですが、投獄されていたため、手紙を通してでしか連絡ができませんでした。そして処刑される可能性が迫る中、パウロは自分がまだ元気であることを教会に伝えなかったのです（1:12-18参照）。パウロはまた、ピリピの教会からの継続的な支援に感謝を表しています。当然、投獄されることは社会的に汚名を伴うものであり、この時点でピリピの人々がパウロに背を向けるのは簡単でした。しかし、教会の人々はパウロに忠実であり続けたのでした。

パウロにとっての一番の優先事項はピリピ人への手紙1:25に書いてあります(1:25参照)。当時、どうやら教会の信徒の中で少なくともユウオディアとシンティケとの間に何かしらの争いがあったことは疑いの無い状況のようです。(4:2参照)、しかしそのような状態を踏まえても、ピリピの信徒たちは比較的、健全な教会に属する会衆でした。そういう意味ではピリピの教会は、コリントやガラテヤの問題を抱えた教会とは対照的な人々でした。このように健全であるように見えるにもかかわらず、パウロは彼らもまた、すべてがうまくいっていると安心して気を緩めるべき理由はまだないと見ています。この世は危険に満ち溢れている一方、福音は栄光に満ち溢れているものですから、過去の成功に満足して立ち止まってはならないのです。(3:12-16参照) 彼らはパウロに倣って、「キリスト・イエスにあって神が上に召してください」という、その賞をいただくために、目標を目指して」走っているのです(3:14参照)。

この手紙の中でパウロは霊的な進歩とは一体どのようなものなのかを説明しています。クリスチャンにとっての成熟とは、一部の人にしか得られないような神秘的洞察や特別な悟りを通してではなく、愛を持って他者への奉仕し続けることなどの美德を忍耐強く実践していくことによりもたらされます。パウロは、自分自身をそのような生き方の模範として示し(1:12-18; 3:17; 4:9参照)、そしてテモテとエパフロディトもまた、同じような生き方の模範であるとして称賛しています(2:19-30参照)。パウロは、すべての信者が神の栄光を受けるには値しないことを理解しており、そのため自分自身が示す模範を超越した、最高の模範であるイエス・キリストを指し示しています。

この手紙の中心となるのは「キリストについての讃歌」だと言えます(2:5-11参照) イエスは、与えられていた神の栄光という特権を喜んで自ら手放し、しもべの姿を取られました。イエスは、この世を罪から解放するために、十字架という究極の屈辱を受け入れてくださいました。それゆえ、イエスは神のメシアとして最高の栄光を受けとり、この世界全体から賛美・礼拝されるようになりました。キリストを模範として彼に従う者達は、神もまた自分たちを贖ってくださるとい希望を持ち、それゆえに喜ぶことができます(1:18、3:1、4:4参照)。このため、信じるもの達は神がこの世において、人々が自分の努力で精一杯道を切り開かなければいけない状況に放っておかれることなく、必ず神が共にいてくださることを自信を持って確信することができます。霊的な進歩には努力が伴うものです、なのでパウロは「恐れおののいて自分の救いを達成するように努めなさい。」(2:12参照)と励まします。彼らがそうすることができる理由は、「神はみこころのままに、[あなたがたのうちに]働いて志を立てさせ、事を行わせてくださる方です。」(2:13参照)と知っているからです。

**イエスは、  
与えられていた神の栄光という特権を  
喜んで自ら手放し、  
しもべの姿を取られました**



恵みと感謝

# ピリピ人への手紙1:1-11

# ピリピ人への手紙 1:1-11

## 恵みと感謝

### 聖書箇所

ピリピ人への手紙 1:1-11

### 主な目的

ピリピ人への手紙の主要なテーマは励ましです：パウロはピリピに住む信徒たちが、天国へ移住する市民として、この世での生活を送れるように、彼らを励ましたいのです。この生き方が出来ているかどうかは、神に仕え、またお互いに仕えることへの決意の深まりによって証明されるものです。パウロが勧める生き方とは、イエス・キリストの生き方にのみ現されているものではなく、パウロ、テモテ、そしてエパフロディトの生き方にも現れています。

### 概要

ピリピ人への手紙は、他のパウロによる書簡と同じパターンに従って書かれています。感謝、祈り、道徳的勧め、挨拶、祝福の同じ流れの手紙の構成を見ると、それらの手紙はすべてパウロが書いたものであることがわかります。パウロは、異邦人への宣教に必要な祈りと経済的援助を通して支援してくれている人々に宛てて書いています。パウロは同じ目的のために協力している働きに貢献するためにも以下のことを綴っているのです。

- 彼らのために祈っていること
- 個人的な近況報告
- 自分のいる地域における福音の働きを報告
- 霊的な励まし
- 彼の宣教を支えてくれていることへの感謝

この手紙は喜びの雰囲気満ちています（「喜び」や「喜ぶ」という言葉が繰り返し十数回出てきます）、それは著者と受取人との間に強く結ばれた人間関係が既にあるため、（手紙の初めから終わりまでこの人間関係は常に著者の観点にあるようです）、そしてイエス・キリストの救いの御業と彼に従う者たちの奉仕の働きとの間にも関連性があることが繰り返し語られているためです。



## 観察と意味

1. ピリピ人への手紙の著者は誰ですか (1:1)? パウロはどのように自分自身を同労者だと表明しましたか? (1:1)? 誰に対してこの手紙は書かれていますか (1:1)?

ピリピの信徒へのパウロの挨拶を読むとすぐに恵みのテーマが掲げられているのが分かります。パウロが自分自身をイエス・キリストの僕として語ることができたという事実もまた、彼の人生における神の恵みを証するものでした。ここで挨拶をしているのは、傲慢で独善的な教会の迫害者であった男です (使徒9:1-2、ピリピ3:6参照) パウロは、文字通り「聖なる者」を意味する「聖徒」という言葉を使って、福音において私たちのアイデンティティが変えられたことを思い起こさせています。イエスの御業によって聖められた私たちは、今の新たな自分を反映した聖なる生活を送るよう求められているのです。変わらず、福音の命令は、私たちとイエス・キリストとの関係にある指標に基づいている。

2. パウロはピリピの人々へどのような挨拶を送りましたか (1:2)?

恵みと平安、にはただの手紙の挨拶に使われる言葉以上の意味合いがあります、それは神からのもっとも素晴らしいふたつの贈り物だからです。平和とは神との間で回復され、もはや敵対しない関係にあることです。この2つの贈り物は、イエスの十字架上での自らを犠牲にした御業とその後の復活によってもたらされました (ピリピ2:1-11)

3. パウロがピリピの信徒たちのこと、彼は何をしていましたか (1:3)? ピリピの人々はパウロとどのような協力関係にあったのでしょうか (1:4-5)? パウロは何を確信していましたか (1:6)?

ピリピ人達のためのパウロの祈りには、福音だけが生み出すことのできる感謝が含まれています。福音がパウロにとてつもない喜びをもたらしたのは (ピリピ1:3)、ピリピの人々が福音の働きに協力してくれたから (ピリピ1:5) だけでなく、パウロが彼らの人生における神の継続的な働きを確信しているからです (ピリピ1:6)。パウロがここで「携わる・パートナーシップ」を意味する言葉として使っているのは、ギリシャ語の「コイノーニア」で、この言葉はしばしば「交わり」と訳されます。パウロはこの手紙の中でこの言葉を6回使っています (ピリピ1:5、7、2:1、3:10、4:14-15参照)。宣教のための経済的支援だけでなく、福音のために共に働くという意味も含まれているのです。同じ単語が数節後 (7節) に「共に恵みに預かった人」と訳されていますが、これは救いの恵みに共に預かることを意味しています。

4. パウロはピリピ教会についてどのように感じていたのでしょうか (1:7-8)? パウロは何を祈ったと報告していますか (1:9)? パウロはどのような二つの結果を求めたのでしょうか (1:10-11)?

パウロは、福音が義認（神の前に私たちが正しい立場にあるという神の正しい宣言）だけでなく、聖化（漸進的な聖さ）をも生み出し、それは必然的にイエスが再臨される時の私たちの栄化（完全な聖さ）につながることを感謝しています。クリスチャンは、神の継続的な働きに対する継続的な感謝と確信に満ちた共同体として生きるよう召されています。福音が成長し続けるための機会としてだけでなく、愛と知識と見識において成長するための挑戦や試練としても、他者との福音において共に携わる関係は祝福されるべきなのです。

## 適応

- 神の恵みと平和とは、あなたにとってどのような意味を持つでしょうか？自分の言葉で表現してみましょう。
- 福音のために、あなたはどのような形で他の人と「パートナー」となっているでしょうか？
- あなたの義認（神の前での正しい立場）が、あなたの聖化（漸進的な聖さ）にどのような影響を与えているかを説明してみてください。やがて栄化（完全な聖さ）を経験するとき、あなたはどのように感じると思いますか？

## 恵みと平安、

**にはただの手紙の挨拶に使われる言葉以上の意味合いがあります、それは神からのもっとも素晴らしいふたつの贈り物だからです。**



福音の前進

# ピリピ人への手紙 1:12-18

# ピリピ人への手紙 1:12-18

## 福音の前進

### 聖書箇所

ピリピ人への手紙 1:12-18

### 主な目的

ピリピ人への手紙の主要なテーマは励ましです：パウロはピリピに住む信徒たちが、天国へ移住する市民としての生活を送れるように、彼らを励ましたいのです。この生き方が出来ているかどうかは、神に仕え、またお互いに仕えることへの決意の深まりによって証明されるものです。パウロが勧める生き方とは、イエス・キリストの生き方のみ現されているのではなく、パウロ、テモテ、そしてエパフロディットの生き方にも現れています。

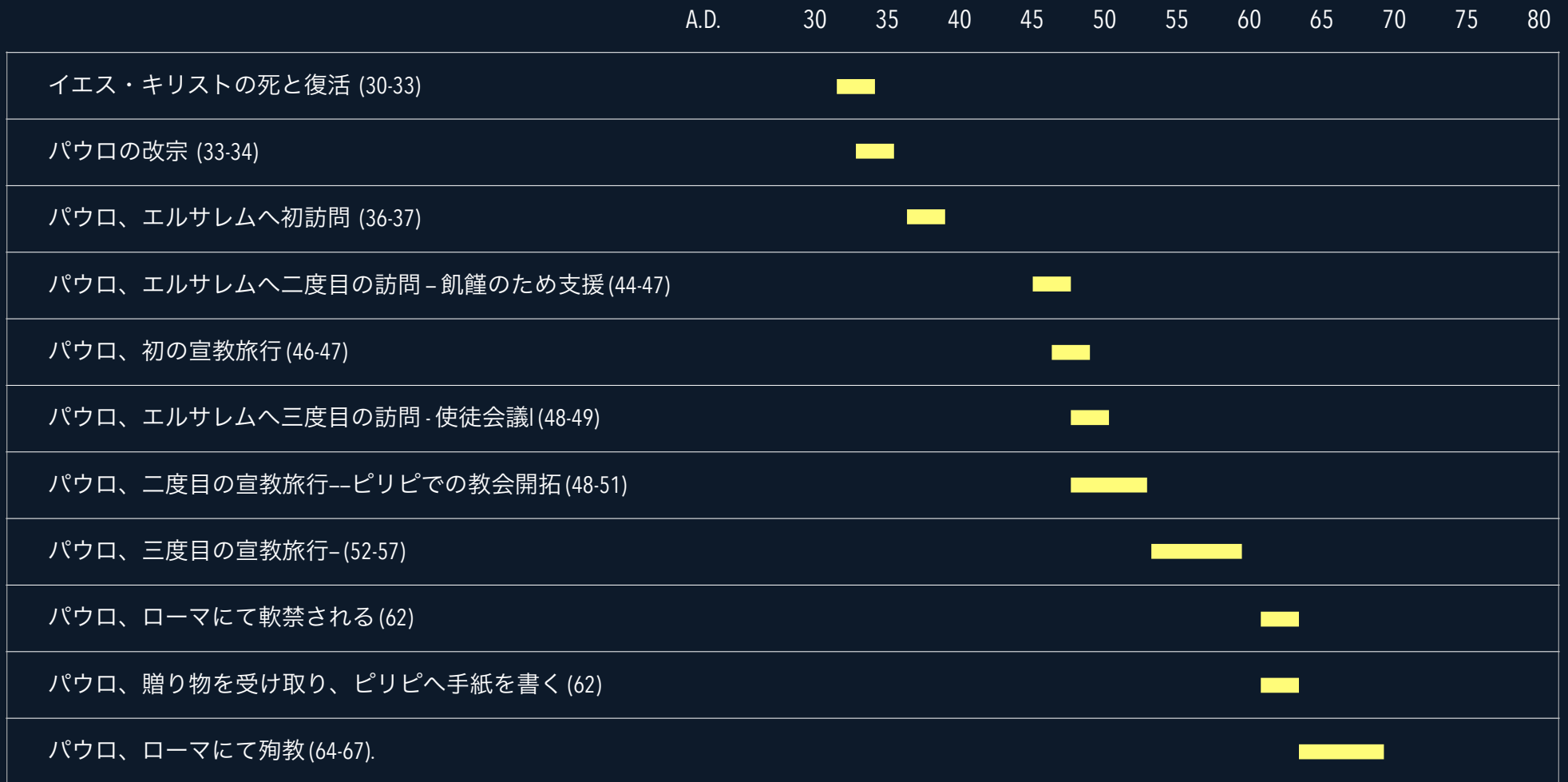
### 概要

パウロは福音についての考察を続けながら、神の御業が彼に対する迫害によって妨げられることはないと説明しています。むしろその逆とも言えることが起こっているのかもしれませんが、実際、パウロの投獄が福音の成長の障害になっているのではなく、逆に神がそれを用いて福音を前進させているのです。なのでパウロは、キリストの『ために』投獄されたと言うことができます（ピリピ1:13）。彼の投獄は、他の人々にキリストを宣べ伝える大胆さを鼓舞するものとなりました（ピリピ1:14）。パウロは、対抗心からキリストを宣べ伝える人々を喜ぶ理由さえ見出しています（ピリピ1:15-16）。

パウロと共に、私たちが持てる福音に対する確信と喜びは、決して試練によって疎外されるものであってはなりません。クリスチャンに対する敵意は、福音を通して正しく見るとき、私たちが恐れることなく良い知らせを語る勇気をも与えてくれます（パウロたちがそうであったように）。パウロが迫害や、敵対心から説教をする人たちをも喜べることを知ったように、私たちもまた、イエスへの忠誠ゆえに訪れる苦しみを恐れることから解放されます。そのような苦しみは、私たちが苦しむ救い主とのより深い交わりへと導いてくれるものです（3:10 参照）。

## 出来事の時系列

手紙の先に進む前に、  
この手紙にまつわる出来事の時系列を思い出しましょう



## 背景

紀元前42年、フィリッピの戦いにて勝利したアントニーとアウグストゥスは、マケドニアの都市を再興しました。アウグストゥスの植民地としての特別な地位により、この都市は課税を免除され、さらに土地所有の特権を与えられていました。都市は良好な農地に囲まれ、エグナティア街道（紀元前2世紀半ばに建設されたローマの重要な街道）沿いに位置していました。パウロの生きた時代の考古学的遺跡を調べてみると、劇場、商店、2つの城門の存在を物語っています。演説台の近くにある1つの小さな石造りの地下室（貯水槽の上に建てられていた）は、後の教会の伝承では、パウロとシラスの牢獄跡とされています（使徒16:23-34）。

## 観察と意味

1. パウロの宣教は、その囚われの身になったことによりどのような影響を受けたのでしょうか（1:12-14）。なぜパウロについてのことが話題となっていたのでしょうか（1:13）？

パウロが福音の「前進」に使っている単語は、後にピリピの信徒たちの信仰の「前進」（英語だと進歩・成長の単語が当てられています）に使われている言葉と同じです（ピリピ1:25参照）。

クリスチャンは、過去や現在の問題に囚われるのではなく、神の御国を前進させることに心を向けるべきです。

2. パウロが投獄されたことは、他の人々の証しにどのような影響を与えたのでしょうか（1:14）？
3. ねたみや争いからキリストを宣べ伝える人がいたのはなぜでしょうか（1:15-17）？一方でなぜ、ある人々は愛をもってキリストを宣べ伝えていたのでしょうか（1:15-16）？

ねたみや争い、対抗心からキリストを宣べ伝えた人々は、福音を宣べ伝えながらも、何らかの理由でパウロと対立していたクリスチャンだと考えられます。

4. そんな中、パウロを喜ばせたのどのようなことでしたか（1:18）？

## 適応

- 福音のために投獄されたパウロの姿から感化されたことはありますか？
- どのような場面で、福音を伝えたり、イエス・キリストに忠誠を誓ったりすることを恐れることがありますか？
- 誰かが福音を宣べ伝えているのを聞いたとき、あなたはどのような反応を示すと思いますか？身がすくむでしょうか、それとも喜ぶでしょうか？



生きることはキリスト

# ピリピ人への手紙 1:18-26

# ピリピ人への手紙 1:18-26

## 生きることはキリス

### 聖書箇所

ピリピ人への手紙 1:18-26

### 主な目的

ピリピ人への手紙の主要なテーマは励ましです：パウロはピリピに住む信徒たちが、天国へ移住する市民としての生活を送れるように、彼らを励ましたいのです。この生き方が出来ているかどうかは、神に仕え、またお互いに仕えることへの決意の深まりによって証明されるものです。パウロが勧める生き方とは、イエス・キリストの生き方のみ現されているのではなく、パウロ、テモテ、そしてエパフロディットの生き方にも現れています。

### 概要

パウロは、この手紙の主題である「どんな状況にあっても福音を喜ぶこと」について繰り返し語ります。

これは単なる理由なく信じ込むことによる喜びではありません。ストイックに頑張り続けることでもありません。むしろ、神の目的が最後には勝利するということに確信がある喜びなのです（ピリピ1:19）。

パウロはまた個人的なジレンマに直面していることを書き記しています（ピリピ1:23）。ローマ帝国により処刑され死ぬ可能性を考え、（肉体のままにいるのと死ぬのと）どちらがいいのだろうかと考えています。いずれにせよ、パウロはイエスが尊ばれることを望んでいます。この手紙の中で最も力強い文言のひとつで、パウロは死ぬことが「益」であり、生き続けることは「キリスト」であると認めています（ピリピ1:20）。かつて苦しみを受け、今は復活されたイエスと信仰者の結びつきを肯定するこの言葉は、私たち自身と救い主との関係についても洞察を与えてくれます。宣教の働きを続けることによって、パウロはすでに自分のアイデンティティとなっているキリストをさらに確認することになります（ガラテヤ2:20、コロサイ3:4参照）。個人的な試練を通して、パウロはイエスの犠牲的な奉仕の生涯についてさらに学びます。今、私たちがイエスと結ばれて生きている人生もまた、（私たちの罪や弱さにもかかわらず）私たちにアイデンティティと必要となるものを与えてくださるお方についての理解を深めさせます。その結果、私たちは、キリストにある他のすべての人々と一つに結ばれた神の大切な子どもとして、私たち一人ひとりに対する神の配慮と目的を確信することができます。



## 観察と意味

1. なぜパウロは苦境からの解放を期待したのだと思いますか (1:19)? パウロはどのように解放されることを期待したのでしょうか (1:19-20)?

牢獄からの解放か、永遠の救いからの解放か。パウロは投獄されたことに言及し（ピリピ1:12-14）、また永遠のことにも焦点を当てているので（ピリピ1:23）、もしかするとパウロは両方の意味を意図しているのかもしれませんが。しかしパウロにとって重要なことは、生死ではなく、信仰者としての忠実な証しを維持することです。

2. パウロが生きる主な目的は何だったと思いますか (1:21)?

パウロの人生は、イエスの御国を前進させることに尽きます。したがって、生きることはイエスに仕えることです。死ぬことにより、パウロはイエスの御前に出ることができるため、彼にとって益でした。

3. 生きることと死ぬことについて、パウロはどのような確信を持っていたのでしょうか (1:22-24)?

パウロはイエスの道とは、仕える道であることを知っていました（ピリピ2:5-11参照）。パウロはピリピの信徒たちの信仰の進展と喜びのために共にいることを確信しています。パウロはイエスの道とは、仕える道であることを知っていました（ピリピ2:5-11参照）。

パウロはピリピの信徒たちの信仰の進展と喜びのために共にいることを確信している。パウロは自分の危機について考えているのではありませんでした。彼はピリピの信徒たちに「奉仕主導」の生き方のモデルを示しているのです。

パウロが、自分の望みはキリストとともに旅立つことだと書いているのは、信者が死ぬと、肉体が死からよみがえるずっと前に、キリストとともに直ちにすることになることを認識しているからです（1コリント15:23参照）。イエスが来られるとき、すべての民は復活の肉体を受けます。その時まで、死んだ人々は霊として天に存在することになります（2コリント5:8、ヘブル12:23、黙示録6:9参照）。

4. なぜパウロは、まだ自分が生きていられると考えたのでしょうか (1:24-26)?

## 適応

- あなたの人生のどのような点において、神の御国の発展よりも自分自身の国の発展のために生きているのでしょうか？
- あなたの個人的な試練を通して、イエスの犠牲的な奉仕の生き方について、どのように学ぶようになったことがあれば教えてください。
- あなたが生きる主な目的は何でしょうか？この質問には、なるべく正直な思いを答えるようにしましょう。



福音の市民権

# ピリピ人への手紙 1:27-30

# ピリピ人への手紙 1:27-30

## 福音の市民権

### 聖書箇所

ピリピ人への手紙 1:27-30

### 主な目的

ピリピ人への手紙の主要なテーマは励ましです：パウロはピリピに住む信徒たちが、天国へ移住する市民としての生活を送れるように、彼らを励ましたいのです。この生き方が出来ているかどうかは、神に仕え、またお互いに仕えることへの決意の深まりによって証明されるものです。パウロが勧める生き方とは、イエス・キリストの生き方のみ現されているのではなく、パウロ、テモテ、そしてエパフロディットの生き方にも現れています。

### 概要

ここではパウロと同じように、ピリピの人々も福音にふさわしい生き方をするよう求められています（ピリピ1:27-30）。これには、苦しみを通る時もしっかりと耐え忍び続けることが含まれています（ピリピ1:29）。パウロは文字通り、ピリピの人々に福音にふさわしい「市民」として生きようと語っています（ピリピ1:27）。この世で苦しみながらも、彼らは天国に属する市民なのです。パウロは、福音に結ばれ、敵対する者を恐れず、堅く立つとき、彼らの生活が福音の印となることを彼らに思い起こさせています（ピリピ1:28）。

パウロやピリピの人々のように、私たちもまたイエスの恵みと奉仕にふさわしい生き方をするよう求められているのです。私たちは既にイエスと一つとされており、私たちの国籍は天にあるのだから、私たちは迫害にも落ち着いて立ち向かうべきなのです。そうすることで、私たちのために苦しまれたキリストの福音が真実であることを示すことができるのです。驚くことに私たちは最も困難な状況にさえ喜びをもって立ち向かうことができるようになります。私たちは、この世の範疇では説明できないような喜びに招かれているのです。

## 観察と意味

1. パウロは信者たちに何をさせたかったのでしょうか (1:27-30)?

ピリピの信徒たちが『キリストの福音にふさわしく』生きることを続けなければ、パウロの犠牲と奉仕は無駄になってしまいます。ピリピの都市はローマの植民地であることを誇りとし、ローマ市民としての名誉と特権を市民に提供していました。そんな中、パウロは信徒たちに、自分たちの行動の模範をカイザルではなくキリストに求めるべきであると言っています。ピリピの人々はお互いに協力し合い、そしてパウロと共に福音のために尽力する必要があります。パウロが一致を強調するのは、ピリピの信徒たちの中に分裂があることを示唆しているのかもしれませんが (4:2-3参照)。


2. パウロはピリピの信徒たちに、どのように反対者に立ち向かうように言いましたか (1:27-30)? パウロはピリピのクリスチャンたちをどのように励ましたか (1:29)?

パウロがここで言っている反対者とは、先に述べた反対者とは異なるようです (1:15-18参照)。ここでパウロはピリピで起こっていることについて語っていますが、先に言及した相手はおそらくローマにいる人達を言っていました。パウロはイエスの教え (マタイ5:10-12) に従い、ピリピの人々に、迫害は彼らがキリストに属していることを示すものであることを思い起こさせています。

苦しみも信仰も、神の賜物として私たちに与えられています。イエスのために苦しむことは大きな特権なのです (使徒5:41参照)。パウロは再び、敵対的な不信者からの反対を経験しながらも喜びを保っている人の例として、自分自身を紹介しています。

## 適応

- パウロは彼の期待される訪問を前にして、ピリピの信徒たちに『キリストの福音にふさわしい』生活を送るように勧めています (ピリピ1:27参照)。キリストの福音にふさわしい生き方とはどういうことだと思いますか？
- 「キリストの福音にふさわしい」生き方をするには、今日のあなたの生き方にどのような影響を与えますか？
- キリストのために苦しむことは、なぜ祝福なのでしょう (ピリピ1:29参照)。



健全な共同体

# ピリピ人への手紙 2:1-5

# ピリピ人への手紙 2:1-5

## 健全な共同体

### 聖書箇所

ピリピ人への手紙 2:1-5

### 主な目的

ピリピ人への手紙の主要なテーマは励ましです：パウロはピリピに住む信徒たちが、天国へ移住する市民としての生活を送れるように、彼らを励ましたいのです。この生き方が出来ているかどうかは、神に仕え、またお互いに仕えることへの決意の深まりによって証明されるものです。パウロが勧める生き方とは、イエス・キリストの生き方のみ現されているのではなく、パウロ、テモテ、そしてエパフロディトの生き方にも現れています。

### 概要

パウロはここで福音をどう適応すべきかを明らかにしています：

- 一致 (v.2)
- 謙遜 (v.3)
- 奉仕 (v.4)

私たちはキリストと一つにされたものとして(2:1)、クリスチャンはお互いに対してもキリストに根ざした思いを持って向き合うべきです；

- 同じ愛の心を持って
- 同じ思いとなり
- 対抗することを求めず
- 虚栄心からではなく
- 他の人のことも顧なさい

パウロにとって、この謙遜のライフスタイルは「コイノニア」と結びついています（ピリピ1:5, 7参照）。ここでの励ましとは「キリストにあって」であり、強められるのは私たちの「御霊の交わり」である（2:1）。私たちは御霊によってキリストとひとつになったのだから、ひとつになって行動し（2:2）、キリストに倣うのです（2:5）。このことがパウロにとっての喜びなのです（2:2）。

## 観察と意味

1. キリストとの一致を示す4つの特質とは何ですか (2:1) ? クリ  
スチャンはどのようにしてキリストとの一致を実際的な方法で  
示すことができるでしょうか (2:2) ?

パウロは、励まし、御霊の交わり、愛、慰め、憐れみがキリストにあって現実にあり、ピリピの信徒たちの中に存在していることを知っていました。彼は文章の中で条件文 (もし) を用いて、ピリピの信徒たちに、これらの性質が自分たちの生活に現れているかどうかを考えるように導いています。彼らは、神の栄光に焦点を当てながら、それぞれの異なった賜物 (第一コリント12章参照) を協力的に用いるべきなのです。

2. パウロは自己中心性について何と言っていますか (2:3-4) ?


パウロは、誰もが自然に自分の利益に気を配っていることに気がついていました。重要なのは、自分自身に対する関心と同じ水準のものを他の人々の関心にも適用することです。

重要なのは、自分自身に対する関心と同じ水準のものを他の人々の関心にも適用することです。このような根本的な愛は稀であるため、パウロはイエスの生涯の中にその最高の模範を示しているのです (2:5-11) 。

3. パウロは信者に何を持つように勧めたのでしょうか (2:5) ?

## 適応

- パウロは、励まし、愛による慰め、愛情、あわれみについて、あ  
たかもそれらがピリピの信徒たちの中にもう存在しているかのよ  
うに語っています (1-2節) 。これらのことは、皆さんの教会の中  
に存在していますか? もしそうなら、これらのことがどのように  
実行されているか例を挙げてみましょう。
- パウロは私たちに、一致、謙遜、奉仕を示すことによって福音を  
実践するよう求めています (2-4節) 。これらの中で何があなたに  
とって一番難しいと感じますか?
- クリスチャンが、キリストに従うように互いを励まし勧めること  
について、肯定的な例と否定的な例を挙げてみましょう。



健全な謙遜

# ピリピ人への手紙 2:5-11



# ピリピ人への手紙 2:5-11

## 健全な謙遜

### 聖書箇所

ピリピ人への手紙 2:5-11

### 主な目的

ピリピ人への手紙の主要なテーマは励ましです：パウロはピリピに住む信徒たちが、天国へ移住する市民としての生活を送れるように、彼らを励ましたいのです。この生き方が出来ているかどうかは、神に仕え、またお互いに仕えることへの決意の深まりによって証明されるものです。パウロが勧める生き方とは、イエス・キリストの生き方のみ現されているのではなく、パウロ、テモテ、そしてエパフロディットの生き方にも現れています。

### 概要

これらの聖書箇所に含まれている賛美歌は、イエスによって実践された福音を描写しています（2:6-11）。神であるにもかかわらず（6節）、イエスは天上での特権を捨て、しもべの姿を取り、死に至るまでへりくだられました（8節）。イエスの屈辱の最たるものは、十字架につけられることでした（十字架は、犯罪人の中でも最も卑しい者たちを罰し、貶める暴力的な手段でした）。しかし、神はイエスを甦らせ、普遍的な賛美を与えられたのです（9-11節）。イエスの私たちの罪のためのへりくだった死、葬られ、そして死からの復活こそが、福音の神髄なのです（1コリント15:1-5参照）。

### 観察と意味

1. パウロは信者に何を持つように勧めましたか（2:5）？キリストは人となられた時、何を捨てられましたか（2:6-8）？
2. イエスはどのようにしてご自分を制約の内に置かれたのでしょうか（2:6-8）？キリストはどのようにして完全な神でありながら、同時に完全な人であったのでしょうか（2:6-8）？なぜキリストは、私たちにとって謙遜であり、寛大であること一番の模範であると言えますか（2:6-8）？

イエスが受肉し、人となる前、イエスは「神のかたち」においておられました。この言葉はイエスの「元々の存在」を指しています。永遠の御子は、ベツレヘムで生まれる前から御父とともにおられました（ヨハネ1:1、17:5、24）。パウロが「形」という言葉を使うとき、彼は何かの正確な性質を示しているようです。したがって、「神のかたち」を持つということは、本質的に「神と同等の立場」を持つことと同じことです。このことは、「しもべの形」（2:7）を持つこととは正反対です。神の子は今も昔も、神そのものです。しかし驚くべきことに、イエスは「神と同等の立場」を手にするために、（すでに持っていたのですが）自分の特権を何としても保持するべきだとは考えませんでした。この特権は掴み取るべきものでも、自分の利益のためのもでもありませんでした。この特権を手放し、彼は仕えることに心を向けたのでした。

3. なぜキリストは、神と同じ性質を持ちながら、人間としての制限を負われたのでしょうか（2:7）？

「ご自分を空しくして」の元のギリシャ語には、「国家や特権を放棄した」という意味合いも含まれています。パウロはイエスが神よりも下の立場になったとか、神の属性を放棄したとは言っていません。パウロは、イエスが地上での生涯においても全能、もしくは全知であったかを論じているのでもないのです（ピリピ2.6）。

むしろパウロは、キリストが宇宙の王であるという特権を持っているにもかかわらず、十字架という運命に囚われた赤ん坊となるためにこの特権を放棄したと言っているのです。イエスは人として生まれ、しもべの姿をとることによって、「ご自分を空しくされた」のです。イエスには権力のある地位にとどまる権利があったのですが、罪深い人間への愛ゆえに、卑しい立場を受け入れざるを得なかったのです。空しくなったのは、彼が人間になったからであって、彼の真の神性のいかなる部分も放棄したわけではないのです。

**イエスが人となられた時、  
神性が失われたわけでは  
ありませんでした。むしろ、  
その神性を用いてイエスはご自身に  
人間性を加えられたのです。**

4. 神はどのようにしてイエスを高くあげられたのでしょうか (2:9)? キリストはどのようにして、すべての人とすべてのものに対する主権を手に入れたのでしょうか (2:10)? すべての人はいずれどのような告白をすることになりますか (2:11)?

神の御子が私たちのために人間の姿となられたことは驚くべきことです。しかし、イエスはさらに踏み込んでへりくだり、十字架上で死に至るまで従順になりました。十字架刑は究極の屈辱であり、肉体的苦痛もまたひどいものでした。また十字架は、元々キリストにあった神聖な威厳とは正反対のものでした。だからこそ、十字架はイエスの父への従順を表す究極の表現となったのです。愛ゆえに十字架の上でへりくだることによって、イエスは神の神性（愛である神）を本当に持っていることを示されました。まさにこの理由のために、神はイエスをよみがえらせ、すべての名にまさる名を彼に託し、高くあげられたのです。

## 適応

- 謙遜であることは良いことだと思われがちです。「謙遜」という言葉を聞いて何を思い浮かべますか？
- あなたの文化の中で謙遜が表現される方法と、イエスの生涯の中で謙遜が表現される方法の間に、どのような違いがあると思いますか？
- この世的な謙遜やへりくだりから離れ、イエスの謙遜に倣うためには、どのようなことが必要でしょうか？一緒に祈り、これらの事柄について聖霊の助けを求めましょう。

**イエスは自ら進んでしもべの姿を取るために  
神の栄光の内にある特権を手放されました**



世の光

# ピリピ人への手紙 2:12-18

# ピリピ人への手紙 2:12-18世 の光

## 聖書箇所

ピリピ人への手紙 2:12-18

## 主な目的

ピリピ人への手紙の主要なテーマは励ましです：パウロはピリピに住む信徒たちが、天国へ移住する市民としての生活を送れるように、彼らを励ましたいのです。この生き方が出来ているかどうかは、神に仕え、またお互いに仕えることへの決意の深まりによって証明されるものです。パウロが勧める生き方とは、イエス・キリストの生き方のみ現されているのではなく、パウロ、テモテ、そしてエパフロディトの生き方にも現れています。

## 概要

パウロは、福音の意味を実践的にへりくだった生き方に反映させることがあたかも安易なことであるようには装ってはいません（12-12節）。しかし、それでもこの生き方は必要であり大切なことなのです。

キリストの謙遜さをもって福音を自分自身に適用するとき、私たちはキリストのための光として、世の中で目立ち、輝くようになります（14-16節）。その一方で福音の適用は、とてつもなく困難な作業でもあります。「恐れおののきながら」（12節）、神が私たちのうちに福音の働きをしてくださることを信頼しながら（13節）、私たちの救いを達成するよう努めなければならないのです。そのように生きる中で私たちは不平や苦情から解放された、光り輝くような喜びをもって生きるのです（14節）。

パウロ自身の人生は、キリストのように「注ぎの捧げもの」（17節）となる可能性も含めた、謙遜な犠牲のパターンに従っていました。パウロはこの可能性を恐れるのではなく、喜び、ピリピの人々にも喜んでほしいと願っていました（17-18節）。イエスに従う者として、私たちが進んでいく道が簡単なものとなることを期待することはできません。恵みによる救いは完全に無償で受け取るものですが、だからといって私たちが個人的に支払うべきものが全くないわけでもありません（ルカ14:28参照）。神は働いておられるが、私たちがなすべき厳しい仕事もあります。しかし、キリストのために生きることに対する緊張が、私たちの喜びより大きくなることはありません。イエスの犠牲もまた喜びのうちになされたのであり、私たちも同様に、キリストと他者のための喜ばしい奉仕に迎えられるのです。犠牲を求める福音は、私たちに喜びをも求めています。私たちが一方的に巻き込まれたこの贖い（買い取られること）は、私たちが生ぬるいままでも続けるにはあまりにも偉大なものなのです。この神の恵みに思いを馳せるとき、私たちの心は和らぐことができます。

## 観察と意味

1. 当時ピリピにいたクリスチャンたちは何に従わなければならなかったのでしょうか（2:12）？ピリピのクリスチャンたちは何を達成すべきだったのでしょうか（2:12-13）？神はピリピの信徒たちが神に従うためにどのように助けるのでしょうか（2:12-13）？

ピリピの信徒たちはこれまでも従順でありましたが、この先も恐れおののきながら自分の救いを達成するために、これからも従順であるべきなのです。神にある正義の裁きは落ち着いた生活（恐れとおののき）をもたらしますが、パウロはピリピの信徒たちに、自分たちは決して神の好意に預かることはできないと考えて欲しくはありませんむしろ、神の愛とこれらのことを可能にしてくださる恵みによってのみこのことを見通していくことができます。このことによって彼らは、責任あるクリスチャンとしての生き方に励みながら、同時に神の力ある臨在を喜ぶことができるのです。（v.12）, れは自分の行いによる救いを示唆しているように見えるかもしれませんが（12節）、パウロはそのような教えを明確に否定しています（3:20-11参照）。私たちが善いことをしたいという思いや願いさえも、神から来るのです。

2. パウロはクリスチャンが送る日常生活に関してどのようなことを教えていますか（2:14-16）？なぜピリピの人々は世の光として「星のように」輝いていなかったのでしょうか（2:14-16）？なぜ集会は未信者に対して一致した態度を示す必要があったと思いますか（2:14-16）？パウロがピリピの人たちを誇りに思っ

て自慢できるのはなぜでしたか（2:14-16）？パウロは誰の名誉を気にしていたのでしょうか（2:16）？

ピリピの人々は、歪み、ねじれた世代の中で、光として輝くべきでした。ここでのパウロの言葉の選び方を見ると、イスラエルの荒野の世代と結びついていることがわかります（申命記32:5参照）。曲がった、ねじれた世代になるのではなく、神の御言葉を信じ、それに従うことを堅く守るべき者になるように招かれているのです。

3. パウロは自分の人生をどのように見ていたのだと思いますか（2:17）？パウロはピリピの信徒たちの信仰をどのように見ていたのでしょうか（2:17）？

「注ぎの捧げもの」とは、ぶどう酒を地上に、あるいは祭壇に注ぐことでした（民数記28:7参照）。このことは、神の奉仕のために「注ぎ出される」人生をも示しています（2テモテ4:6参照）。ピリピの人々は犠牲の供え物となるべきなのです。

4. パウロはピリピの友人たちにどのようなことを経験してほしいと思ったのだらうと思いますか（2:18）？

## 適応

喜びはこの手紙の重要なテーマです。以下のリストに目を通し、次の質問に答えてみてください。

- あなたが喜びをもつことは、パウロの持つ喜びとどこが似ていますか？
- あなたの持つ喜びとパウロの喜びとどこが違うでしょうか？
- イエスによって実践された福音のどの部分（ピリピ2:6-11）が、あなたを喜ばせ、より大きな従順への動機づけとなるとおもいますか？

参照箇所	パウロは...
ピリピ人への手紙 1:4	喜びを持って祈る
ピリピ人への手紙 1:18	キリストが宣べ伝えられていることを喜ぶ
ピリピ人への手紙 1:25	ピリピの信徒達の信仰の喜びのために地上で生き続ける
ピリピ人への手紙 2:2	ピリピの信徒達に彼の喜びを満たすように伝える
ピリピ人への手紙 2:17-18	ピリピの信徒達と共に喜ぶ
ピリピ人への手紙 2:28	ピリピの信徒達が喜ぶようにエパフロディトを送る
ピリピ人への手紙 2:29	ピリピの信徒達へ喜びを持ってエパフロディトを迎えるよう伝える
ピリピ人への手紙 3:1	ピリピの信徒達が主にあって喜ぶよう伝える
ピリピ人への手紙 4:1	ピリピの信徒達が彼の喜びであることを伝える
ピリピ人への手紙 4:4	ピリピの信徒達へ主にあって喜ぶよう二度伝える
ピリピ人への手紙 4:10	ピリピの信徒達が彼を案じてくれていることを主にあって喜ぶ

<https://www.gracecity.jp>

